



177号  
2012/10/1

日中文化交流市民サークル'わんりい'  
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
<http://wanli-san.com/>  
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp  
◆'わんりい' HPのアドレスが上記になりました。



遊びに興ずる長角ミャオ族の少女(貴州省)

2004年11月 撮影：奥脇弘久

‘わんりい’ 177号の主な目次

|                           |       |
|---------------------------|-------|
| 北京雑感(68)お風呂               | 2     |
| 私の調べた諺・慣用句(13)「邯鄲の歩み」     | 3     |
| 媛媛讲故事(47)「土中に隠したお金」II     | 4     |
| 中国-城市めぐり(18)「成都市・そのII」    | 6     |
| 読む(番外)「黙祷しながら思うこと」        | 9     |
| 松本杏花さんの俳句集「千里同風」より        | 9     |
| 「四姑娘山・写真だより」の里を訪ねて③水道の怪   | 10    |
| モンゴル滞在日記 I                | 12    |
| 【わんりい活動報告】月餅を作ろう!会        | 14    |
| つながりひろがる地域支援事業開催に当たって     | 15    |
| スリランカ紹介(61)「スリランカ人の物差し」II | 16    |
| アジア映画鑑賞③スリランカ映画について(前)    | 17    |
| 私の四川省ひとり旅(58) 4度目の康定で     | 18    |
| 食について考えた2本の映画             | 20    |
| 「中国の笑い話②」                 | 21    |
| ‘わんりい’ 掲示板                | 21・22 |

【表紙写真説明】

貴州省には多くのミャオ族が居住している。しかも、地域や村落ごとに、独特な服飾や文化を持っている。平地の長裾ミャオ、山間部の短裾ミャオなど。なかでも、大きな髪形の長角ミャオには驚かされる。

上の写真は民族の踊りを披露した後の休憩時に、少女たちが仲間で遊び出した光景。なんと、日本の「せっせっせ」と同じではないか。無邪気な笑顔とともに、郷愁を感じさせた。

「天に三日の晴れ間なし、地に三里の平地なし」といわれる貴州へは、山間僻地を厭わず、秘境を訪ねる心がまえたのだが、少数民族との出会いは、期待以上のものをもたらしてくれた。蘆笙の音と、お酒での歓迎も印象に残っている。

(この写真は、NHK・BS1の番組「ほっと@アジア」に投稿し、平成24年8月22日に放映されました。

(奥脇 記)

夏の猛暑も、最近朝夕の秋の気配に押され気味ですが、日中の暑さはまだまだ侮れません。日本の暑さは、気温の高さよりも湿度の高さが著しくて、身体に纏わりつく汗で疲れが倍増するような気がします。そんな時、浴槽に少し熱めのお湯を張って、ザブンとつかって汗を流すだけでも、生気が戻った気分になります。最近の若者は、シャワー愛用者が多いようですが、私どもの年代では、浴槽に身を沈めないと、落ち着かないと言う人が多いようです。

北京に住み始めた頃、日本からやってくる友人に、「欲しいものがあれば、持って行ってあげるけど、何が良い？」と言われて、「水をいっぱいにはった風呂桶を一つ持って来て！」と、冗談半分、本気半分で言ったものでした。北京に新しく建つ高層マンションは、特別に高級でなくても、殆どの場合トイレと浴室が二つあります。トイレと浴室は一緒のことが多く、主寝室に隣接する浴室は、西洋式バスタブを備えたものですが、もう一つはシャワーだけです。しかし、どちらも、トイレとはガラスの壁で仕切っているので、昔風のホテルのようにシャワーを使うとトイレの床がびしょびしょになることはありません。かなり快適な浴室と言えるでしょう。初め2,3回、勧められてバスタブを使わせて貰いましたが、タブに貯めたお湯は、水の使用量が目に見えるので、水不足が話題となる北京では落ち着いて入っていただけませんでした。

北京では、シャワーで我慢していましたけれど、一度、皇帝の行宮のある河北省の承德へ行ったとき、日本の銭湯のようなお風呂に入りました。この承德は、避暑山庄と言われ、夏の間、清朝の皇帝がここに移動して政務を行ったところで、夏も涼しく、美しい街です。近代の歴史は不勉強で、正確なところは分かりませんが、聞くところによると、先の戦争中、日本軍もこの快適な気候に魅せられて、暫く司令部を置いていたようです。その時、将兵の為に日本式の銭湯を建てたのだそうで、それが今も残っていて、「温泉」として利用されていました。

中に入ってみると、プールの更衣室のように改造された脱衣所があり、すぐに浴室へ入れるようになっていました。そこには何故かビーチサンダルが何足か並んでいました。浴室は広くて、半分近くを占める

浴槽があり、お湯がたっぷり入っていましたが、浴槽は丁度プールのように地面に直接掘られたような造りでした。見ると、その浴槽のふちにもビーチサンダルがあり、浴槽に何人かの中国の人たちが入っていました。観察してみると、どうやら洗い場はビーチサンダルを履いて歩くようでした。更に見ていると、ビーチサンダルを履いたまま湯船に入る人がいて、吃驚しました。しかし考えてみれば、洗い場だけで履くサンダルですし、湯船に入る前にお湯をかけていましたし、「ま、良いか」と覚悟を決めて、湯船に身を沈めました。

何人かで一斉に入ったのでお湯があふれ出し、洗い場を流れていきました。私にとっては約一年ぶりのお風呂なので、どっぷりと湯につかり、あふれ出して流れるお湯の音を聞きながら、思わず「極楽！極楽！」と呟いていました。この気持ちよさは、10年近くたった今日でも、しっかりと思い起こすことが出来るほどに、脳裏に焼きついています。

この後大分経って、泰山に登ったとき、麓の泰安の町で、汽車の発車まで時間がありましたので、銭湯で汗を流すことにしました。中国人の友人たちと一緒に、彼らは日本に留学したことがあり、日本の銭湯のよさを知っているのので、私と同じように湯船に浸かって汗を流すつもりだったようでした。しかし、入ったお風呂屋さんには、広いけれど、壁に仕切りをしたシャワーが多数取り付けられているだけで、湯船はありませんでした。その代わり洗い場の中央に簡易ベッドがおかれ、マッサージやあかすりのサービスが受けられるのでした。マッサージよりも湯船に浸かって、泰山登山の達成感を反芻するほうが余程疲れが取れるのにとすると、本当に残念でした。

北京の街には「沐浴」の看板を掲げたお店を時々見かけますが、皆、泰安の浴場のような形式で、承德のように湯船があるところはないようです。やはり、湯船に浸かる入浴は、日本独特の文化なのでしょうか。

北京の郊外には、「温泉」と銘打った施設がありますが、これはさまざまな趣向を凝らした大小の温水プールがいっぱいあって、水着で入るところで、日本のレジャーランドのような施設です。日本の温泉とは全くちがったものです。



## 邯鄲の歩み

私の調べた諺・慣用句 13

三澤 統

人間は誰でも、他人の格好の良い振る舞いを見て、「あゝ、自分もあんな風に格好良く出来たら良いのになあ」と憧れることがあります。「よし、自分も真似してみようか!」と頑張ってみるのも良いかも知れません。でも、身の程ということもありますので“要注意”です。

今回の諺・慣用句は、昔、中国の田舎に住む青年が、分不相応な挑戦をして、とんでもない目にあってしまったという「邯鄲の歩み」を取り上げました。

辞書には次のように載っています。

### ▲ 小学館 デジタル大辞泉 (電子辞書) :

**邯鄲<sup>1)</sup>の歩み** 昔、燕の青年が邯鄲に歩き方を習いに行ったが習得できず、故国の歩き方も忘れ這って帰ったという「莊子<sup>2)</sup>」秋水の故事から。むやみに他人のまねをすれば、自分本来のものも忘れて、両方とも失うことのたとえ

### ▲ 小学館 中日辞典 (電子辞書) :

**邯鄲学歩 (hándān xué bù)** 他人のまねをしてうまくいかず、自分の本来の技能までも失ってしまうこと。語源：戦国ごろ、趙の都邯鄲に行った燕国の人が、人々の歩く姿勢が美しいのを見てまねようとしたが、うまくまねできなかつたばかりか、自分本来の歩き方まで忘れてしまい、這って国に帰ったという〈庄子〉の故事から

昔、中国の燕<sup>3)</sup>の国の寿陵という田舎町に、一人の青年が居りました。彼は趙国の都の邯鄲の人々は歩き方がとても優美だということを聞き知りました。そこで、思い切って邯鄲まで歩き方を学習しに行くことにしました。

到着してみると、なるほど人々の歩き方は、寿陵の人たちとは全然違って、まことにスマートだということがわかりました。早速、邯鄲の人たちの後ろについて歩きながら、その歩き方を真似してみました。

でも、どうしても彼らと同じようにスマートに歩くことが出来ません。彼は自分の身体に何か原因があるのではないかと考えました。いろいろ考えた末、もともとの自分の歩き方にあまりにも慣れすぎたことが原因だとの結論に達

しました。そこでもとの歩き方を放棄して、新規まき直して、邯鄲の人たちと完全に同じ歩き方に変えることにしました。

そして道を歩きながら、邯鄲の人たちの上半身の左右への動かし方、手足を動かす順序を確認し、それぞれの動かす幅まで考えました。その為一歩歩くごとに猛烈に疲れて大汗をかいてしまうのでした。そんなふうに頑張っても結局邯鄲の人たちのようには歩くことが出来ませんでした。

そして終には自分のもともとの歩き方さえ忘れてしまい、なんと自分が住んでいた寿陵まで這って帰ることになってしまったのです。

### 〈注記〉

1) **邯鄲**<sup>かんたん</sup>：戦国時代の趙の首府であり、日本ではとりわけ「邯鄲の夢」「邯鄲の歩み」の故事によって有名である。現在の邯鄲市で、中華人民共和国河北省南部に位置する。石炭業のほかセメント製造、鉄鋼業、紡績業、電子産業などが盛んであり、その交通の便の良さから工業が盛んである。 (ウィキペディアより編集)

2) **莊子**<sup>そうし</sup> (庄子 B.C.369年 ~ 286年と推定)：中国の戦国時代の宋国の蒙 (現在の河南省商丘あるいは安徽省蒙城) に生まれた思想家で、道教の始祖の一人とされる。 (ウィキペディアより)

3) **燕**<sup>えん</sup> (B.C.1100年頃~222年)：中国に周代、春秋時代、戦国時代にわたって存在した国。春秋十二列国の一つ、また戦国七雄の一つ。河北省北部、現在の北京を中心とする土地を支配した。首都は薊<sup>けい</sup>で、現在の北京にあたる。 (ウィキペディアより)



イラスト：叶霖 (Ye Lin)

さて、周秀才<sup>註</sup>の一家はその後、どうしているのしょうか？

周秀才は一家を連れて上京し、科挙には合格しましたが、役人になるチャンスは訪れて来ませんでした。用意して来たお金も殆ど使い果たし、結局、古里へ帰えらざるを得なくなりました。

そして、再び長い道のりを旅して古里に戻りました。ところが家に帰りついてみると、家の留守を頼んだ番人は行方が分らなく、しかも裏庭の、肝心な、土堀も崩れてしまっているではありませんか。それよりも心の痛むことは、銀の塊を一杯入れて土堀の下に埋めておいた壺は空っぽでした。

やむを得ずそのまま一家はそこで半年ぐらい暮らし続けました。が、生活はどんどん厳しくなる一方で遂に家を売り払い、そのお金を持って、洛陽の親戚の家へ身を寄せることにしました。ところが洛陽に行ってみると、親戚は既にどこかへ引越してしまっていました。どうしたら良いのでしょうか？いろいろ思案しても良い考えも思い浮かばず、とりあえずは洛陽にしばらく滞在しました。しかし、頼りとする親戚も友人もおらず、お金も底をついてきました。

周秀才は、「洛陽で暮し続けるよりはやはり、古里で暮らした方が心強いかもしれない」と思い、一家を連れて再び古里へ向かいました。

時は、真冬でした。陽も傾き雪がしきりに降っています。周秀才の一家は雪の中を歩き続けもう一息で古里に辿り着くところまで来ましたが、妻と息子は寒さと飢えと疲労で、もう一歩も足を前に出せない状態になりました。

周秀才の妻が「息子のためにも、どうかどこかで一晩休んでくれませんか？」

と頼みました。

「もう宿泊のお金が…」

周秀才は言葉を濁して呟くように言いましたが、妻と息子の様子を見ると哀れになり付近の小さな宿に入りました。

「お邪魔します。私たち家族三人で旅をしているのですが寒さと疲れで一歩も歩けない状態です。どうか、一晩泊めて頂けませんか？」

「ええ、いいですとも。どうぞお泊り下さい」

「しかし、私達は宿泊代も食事代もお支払するお金が一銭も無いのです」

宿の主人は、雪がしきりに降るこのような寒い夜に女も子供も薄い衣服を纏っただけの姿を暫く見つめているうちに憐憫の情を催してきました。

「ああ、子供が可哀想だ。よし、泊めてあげよう」

宿の主人は快く応じて、簡単な食べ物まで出してくれました。三人が美味しそうに食べている様子を見て、主人は言いました。

「お酒でも少し飲みましょうか？」

「いや、もう結構です。お恥ずかしい事ですが、お金はもうすっかりなくなり、明日をどうしてよいかということも分からないのです」

周秀才は顔を曇らせました。

「そうだな。子供が一番可哀相だなあ。」

「本当に言われる通りです。大人はなんとかできますが、息子が心配でたまりません」

ここでみんな黙りました。が、暫くして主人は再び口を開きました。

「可愛い息子さんを見て一つ思いついたことがあります。が、言ってよいかどうか迷っています」

「なんでしょうか？ 息子の為を思って下さるならどうぞなんでも言ってみて下さいますか」

「今のご様子ではご自分の力で息子さんを育てるのは無理のように思われます。あなた達の手元で育てるよりどこか家柄の良い家で育てて貰うのはどうですか」

周秀才は吃驚しました。

「それは、息子を他人の養子にするということでしょうか」

「いや、済まないことを言ってしまいました。息子さんの様子があまりに可哀想に思われて、思わず言ってしまいました」

ここで、再び言葉が途切れし〜んとなりました。

しばらくして周秀才が言いました。

「そのように言われるとそれも良い考えのように思われますが、子どもを貰ってくれるような家柄の良い家がありそうにも思えませんが」

実はこの宿の主人は賈仁の知り合いで、賈仁が子どもを欲しがっており子供の情報があれば教えて欲しいと日頃から頼まれていたのです。

「この近くに、知り合いの金持ちの家があります。しかしどういふ訳か夫婦の間に子供が生まれません。家業の為にも、どうしても子供がほしいと日頃から言われて、何かいい情報があったら教えて欲しいと頼まれ

ているのです。今あなた達のご様子を拝見してお薦めしてもよいかと思ったのです。よく考えられて、その気になられましたら明日お連れしましょう」

宿の主人が言うのを聞いて、周秀才の妻が泣き出しました。周秀才は長い間黙り込んでいました。しばらくして決断したように説得し始めました。

「私たちはもう息子を養う力がないのだ。このままだと乞食になるしかないだろう。乞食になるよりはこの子を引き取ってきちんと育ててくれる豊かな家があったら、息子にとっても幸せなことだと思う。息子の為にもよく考えてみてください」

周秀才の妻は啜り泣きながら頷きました。

翌日、宿の主人は周秀才一家を連れて賈仁の家に行き、先ず自分だけで賈仁の前に行き伝えました。

「良い子が見つかりました。今親と一緒に外にいます。」

「おお、そうか。それは嬉しい。で、子供は何歳になるのだ？ どういう家の子供なのだ？」

「七歳になる男の子です。科挙に合格した者の息子ですが、落ちぶれて困窮しているのです」

「そうか。それでは急いで連れてきてみてください」

賈仁は嬉しそうに言いました。

周秀才の一家が入って来ました。賈仁は子供の前に来ると、まるで物を購入するかのような目つきで、子供の顔をしげしげと見たり、頭を撫でてみたり、手を触ったりしながら子供に訊ねました。

「名前は何？」

「長寿というの」

「何歳になるのだね？」

「七歳になった」

子供は整った顔立ちで目もぱっちりした、いかにも聡明そうな男の子でしたので賈仁はすぐすっかり気に入りました。

賈仁は、「ではちょっと話が有る」と宿の主人を別の部屋に連れて行きました。

もともと賈仁は子供が欲しくて、子供を手に入れるためにはいくらお金を払っても良いと思っていたのですが、実際お金を出す直前になってみると気が変わりました。

「わしのような家へ来れることになって周秀才の息子は本当に運の良い子供といえよう。では、長寿は引き取るので、長寿を残して親は帰らせなさい」宿の主人は、

「子供を引き取って貰えたら周秀才一家は喜ぶでしょうが、お金のことはどうします？」

「何？ 金？ これからはわしが長寿を育てるのだ。本来

なら周秀才が金を出すべきだ。しかし、周秀才にそのまま要求するのはできそうもないし、今の状況も可哀想に思えるから、わしはもう金なんかいらんことにする」

宿の主人は吃驚して

「え？ なんですって！ それでは話が違うではありませんか！ もともとあなた様がお金を出して子供を求めようと言ったのではなかったのですか？」

「貧乏で生活ができなくなった周秀才一家の状態を見かねて俺が救いの手を差し伸べようというのだ。どうしてわしが金を出さなければならないのだ」

「いや、生活するにはお金は必要です。周秀才夫婦はこの子を七年間育てて来たのですからその間に色々苦労したでしょう。特に今は厳しい生活状態にあるのですから、ただで子供を連れて行くなど話にもなりません。仲人の立場の私としても……」

実の所、賈仁のケチは町でも知られたことでしたが、ここに至って彼の人情のないケチさ加減がすっかり暴かれたのでした。

店の主人は話を持ち込んだ責任から色々説得し、賈仁は僅かばかりのお金を出すことを承諾しました。一方周秀才夫婦の方はもともと息子を売るつもりではなく、息子が幸せになるならこれが一番安心に違いないと心を決めていました。そして目前の生活さえ乗り越えることができるなら、お金についてはなにも言いたくないと言って涙を流しながら契約書にサインして息子を残して自分の古里へ帰って行きました。

賈仁は周秀才夫婦が立ち去った後で長寿に言いました。

「これからはここがあなた家だ。誰かに苗字を訊かれたら「賈」だと答えなさい」

「違うよ。僕は「周」だよ」

「わしが美味しい食べ物を食べさせ、きれいな服を着させ、面白い玩具を買ってあげるのだ。これからは「賈」だというのだよ」

「それでもいやだ。僕の苗字は「周」だ。」

と長寿が答えました。

長寿は七歳の子供です。自分が置かれた状況を知っているように見えても本当のところはよく分かっていないのでしょう。どうしても自分は「周」だと言い張り、賈仁は子供が来たばかりなので、暫くは「周」を容認することにしました。そして家中の者に子供の身元を絶対言わないこと、元の親との連絡も絶対してはいけなないと命令しました。

(続く)

【註釈】 秀才：「秀才」は名前ではなく、中国で、古代科挙課目の名称で、それに合格した人。また、そのような人に対する雅称。



次に、杜甫草堂から歩いて15分程度の距離にある「青羊宮」に向かった。少し歩いていると、歩道の中央に片手に槍をもち、顔は隈取し昔の戦争の時に身に着けていたような服を着た大男が仁王立ちしていた。近寄ると、「張飛牛肉」というお店の看板の前で客寄せパンダになっている。

お店の名前といい、京劇に出る張飛の姿に似せた男といい、やはりここは三国志ゆかりの街だけのことはある。一緒に写真を撮らせてもらい、握手をして、それだけでは悪いのでお店の中にはいり「牛肉干」を買った。一口サイズの干した牛肉であるが、これがとてもおいしい。私はこれが好きで中国に行くたびにお土産で買ってくる。

また少し歩くと小さな川があり、そこに「送仙橋」という名の石橋が架かっている。欄干には動物などの彫刻が施されている。何気ない風景であるが、日本では観光地にでも行かねばこのような気の利いた橋はない。その点中国はどこに行っても、見るだけで安らぎを与えてくれる石の橋が多い。いつか町田市長へのハガキに、「町田市内にある橋はどれもコンクリートとガードレールのような欄干の橋ばかりであり、風情がない。多少お金がかかっても架け替え時は特徴のある石橋にしてほしい。そうすれば観光客も増えるのではないか。」と書いたが、これといった特徴のない町田市にとってこのアイデアは如何であろうか。そんなことを思いつつ街路樹の下を歩いていると、青羊宮の前に来ていた。

青羊宮は道教の寺院である。日本では道教の寺院はあまり聞いたことがないが、中国をあちこち旅行する度に道観(道教の寺院)を見ることがあり、中国民衆に深く根を下ろしていることがわかる。

10元を払って境内に入ると、大勢の人がお参りしており、三清殿という本殿らしき建物の前には線香を立てる灰の入った三方のような金属製の大きい箱が置かれていて、そこからもうもうと線香の煙が立っている。日本の線香と違い中国の



張飛牛肉店の前で、張飛と仲良くツーショット



青羊宮の入り口

それは巨大であり、直径5センチ、長さ1メートルを上回る線香も多い。何でも大きいものの好きな国民性のなせるわざか。

三清殿のすぐ脇に銅製のヤギが左右に置かれ参拝者を迎えてくれる。これは、道教の始祖の老子が青いヤギを連れていたという伝説に基づくものらしい。

このヤギは災厄を祓う神羊とされているので、参拝者はみなそれに触れたがり、為に表面は黄金色に光り輝いている。私も負けずに頭をなでてきた。よく見ると片方のヤギの角は一つで、もう片方のそれには二つある。一角のヤギはなんとなくヤギらしくない。友達の説明によると、それは十二支の動物の一部を取り入れて作ってあるという。なるほど顔は馬で、足のつめはトラ、目はうさぎという具合である。あご髭があるところがヤギということらしい。

そういえば「竜」は、中国史の開祖として名高い

〈黄帝〉が天下統一を果たした折、あたらしいテーマとして世界のどこにもない威風堂々とした動物を臣下に考えさせたものと、何媛媛さんの著書「蒼海拾貝」で後日知った。竜は、頭は馬、体は蛇に魚の鱗、鹿の角にイノシシの鼻、象の牙という具合にできているとは知らなかった。竜とヤギの話は何か通じるものがある。

青羊宮の起源は周代(BC1046年頃～BC256年)というからやはり中国の歴史は長い。一説によると老子の生没年は不詳であるが、紀元前6世紀頃道教の基礎を築いたといわれるので、そのころ最初の寺院らしきものが建てられたのかもしれない。

今夕は川劇などのショーを見に行くことにしている。川劇とは、ご存じの京劇と並ぶ中国八大地方劇の一つだ。「川」は四川省の別称である。青羊宮を出たが、ショーまでまだ時間があるので成都市で一番有名でにぎやかな「春熙路」周辺を散策することにした。東京でいえば銀座に相当する場所である。

大通りに出たところに大きな百貨店がいくつもあったので、中に入ってみた。通りを挟んで、「王府井百貨」と「太平洋百貨」があった。どちらもありっぱな百貨店で銀座あたりのそれと引けをとらない。「王府井百貨」のほうがすこし高級で、商品もどれも高い。買う人がいるのかなと心配するほどだったが、地方都市でも市民の購買力が格段に上がったということなのか。ブランド品が多く、おそらく中国人のご婦人方のプライドを満たしているであろう。

あちこちぶらぶらしながら私が驚いたのはいくつもの道路が広いだけでなく、3～4車線の車道のほかにオートバイや自転車専用道があり、さらに歩道も完備している通りがとて多きことである。そして緑地帯でそれぞれの専用道を分けてあるためとても安全である。緑地帯には木々がしっかり植えられていて、緑の豊かな街のイメージを与えている。このように計画的に都市改造したのはいつの頃だか知らないが、先見の明があったと言いきである。

陽も西に傾き、あたりも薄暗くなってきたのでタクシーにのり、ショーの行われる場所

に向かった。目的地は、「蜀風雅韻」という名の劇場である。有名らしく、ガイドブックには次のように紹介されている。〈成都屈指のハイレベルなショーが行われる。劇団員のレベルは成都随一とされ、特に変臉、手影戯、伝統楽器の独奏は見事である〉。

私が特に見たかったのは、「<sup>biànliǎn</sup>変臉(変面)」である。この技は川劇が誇る絶技の一つで、その技は中国の第一級国家機密とされているようだ。テレビでは見たことがあるが、目の前で見るとこの度が初めてである。手やマントで顔を覆った瞬間、開くと異なるデザイン、異なる色の隈取に顔面が変化している。どうみても人間業とは思えない。最後の素顔に至るまで5～6回は変化した。さらに驚いたのは、逆に素顔から隈取の顔に変って行ったのである。素人考えでは順に素顔に至る流れは、顔を覆っている(と思われる)カバーを外していけば可能と理論的には思うが、その逆というのは全く想定外であった。

三百年の伝統があるというが、一体誰が考案した技なのか。この変臉はショーのクライマックスに行われたのだが、次に紹介するショーはいずれも観客を興奮させるのに十分であった。

まずは「<sup>gǔndēng</sup>滾灯」。これは「ぐんだん」と呼ばれるコメディ劇である。一組の夫婦が登場するのだが、話の設定は麻雀で帰宅が遅くなった夫を妻がお仕置きするもので、頭に火のついたローソクを乗せられた主人が妻の言われるままに椅子をくぐったりするアクロバチックな演技をするのである。それだけでなく二人の漫才のような軽妙なやりとりや表情に会場は大いに沸いていた。「カ



四川大学の広いキャンパスでくつろぐ筆者



カア天下」は上海女性の専売特許と思っていたら、四川の女性も有名らしい。つぎに「手影戯」であるが、簡単に言えば「影絵」である。ただし只の影絵ではない。直径2メートル前後の丸いスクリーンに浮かぶ影絵は、生き物の息遣いが聞こえるかのような素晴らしさで、とても人間業と思えない。厳しい修行に裏打ちされた芸という感じがする。観客も息づまるような思いでスクリーンをじっとみつめていた。プロの技であった。最後にもう一つ紹介したいのは、「<sup>nazi</sup>唸子独奏」である。唸子とはチャルメラをいう。日本では夜鳴き蕎麦屋や豆腐売りが吹く楽器と相場が決まっているが、ここでの唸子の七色の音色、変幻自在のメロディは私の先入感を一気に吹き飛ばした。ともかく一度聞いていただくほかない。この劇場の入場券は安くはなかったが、成都の夜を十分堪能させてくれた。

日が改まり、いよいよ王さんと再会する日(2月1日)となった。午後1時にホテルに来られるので、午前中はまず四川大学に向かった。この大学には友人のMさんが1995年に短期留学されたと聞いていたので、この機会に是非見ておこうと思ったのである。中国の大学は、どこもキャンパスが広くゆったりとしている。この大学も正門を入ると、大きく育ったプラタナス並木が奥に向かって伸びている。突き当りは大きな池となっていて、周囲にベンチが置いてあり学生たちが本を読んだりしていた。都心にある日本の大学とは違って静かで落ち着いていた。

成都に行くまで知らなかったが、ガイドブックに四川大学に隣接して「望江楼公園」という有名な公園があり、薛涛ゆかりの地と書いてあった

ので20元払って中に入った。すると一面に竹林が広がっていてやはり成都是パンダが住みよいところなのだ実感する。この公園は、既述の錦江の川沿いに展開している。公園の名前となった「望江楼」は四重の塔で錦江を見下ろすように

立っている。各層の屋根は、それぞれ造りが異なっていて一ある階は四角形、ある階は八角形というように一本来ならバランスの悪い建物となろうが、なぜか一体感を感じさせ川面にもきれいに映えている。正式には「崇麗閣」という名前があるが、望江楼の名前で通っているようだ。

そこからすぐのところに「薛涛井」がある。これは、彼女が晩年この近くに住み、自ら考案した深紅の詩箋である「薛涛箋」を漉いた井戸であるという。私は、この女流詩人を今回の旅で初めて知ったのだが、簡単に彼女の生涯を紹介したい。彼女は、768年に長安に生まれた。李白や杜甫よりすこし遅れて生まれたが、ほぼ同じ時代を生き、役人の父とともに任地の成都に移った。しかし14～5歳のころ父が死に、母と貧しい少女時代を過ごした。生活のため17～8歳ころ妓女となった。美貌の上、才気にあふれていた彼女は地方長官に見いだされ、宴席に列しては白居易、杜牧など当時の有名詩人と詩の献酬をしたそうである。そして前述のように薛涛箋を生業とし、75歳まで生きたという。

書家でもあった。中国は、歴史上に名を残す女性の詩人や作家が少ないが、その中であっては記憶に留むべき女性と思われる。ほかにもこの公園には薛涛の石像、お墓、記念館などがあり、いつかまたゆっくり来てみたいと思った。

(続く)



薛涛の石像



薛涛井の記念碑



8月6日、8月9日、8月15日に、私の職場では、黙祷を行う。ヒロシマに原爆が投下された日、ナガサキに原爆が投下された日、そして戦争が終わった日だ。いつもは騒がしいフロアが、この日、1分間だけ物音がなくなる（時に電話の音が響くことがあるが）。

黙祷の闇につながる闇がある。高校の修学旅行で初めて訪れた沖縄。そこで経験したガマの闇だ。日本で唯一の本土戦となった沖縄では、ガマという鍾乳洞に住民が逃げ込み、戦火を耐えた（なかには集団自決したガマもあった）。私たちは、地元のガイドに連れられて、住民たちがしばらく暮らしていたガマのなかに入っていった。空気が重い。日頃ははしゃぎがちな高校生たちは、無口になり、それぞれの懐中電灯の明かりを頼りに進んでいった。

落ち着いたところで、ガイドが当時の生活を語り始めた。そして、最後にこう言った。「今日、みなさ

んは懐中電灯を持っています。けれど、当時は明かりがなかった。どのくらいの闇か…。経験してほしいと思います」そして、懐中電灯を消す合図が出され、辺りは、闇に包まれた。私は、思わず、近くにいた級友の手を握った。その子のことは、あまり好きではなかったけれど。すぐに彼女が手を握り返してきた。そうでもしていなければ、そのまま闇に吸い込まれてしまいそうな恐怖があった。

私たちは、この闇を、今も内戦や戦争をしている、どこかの国の人たちの「暗闇」だと教わった。過去の苦い歴史を学ぶのは、今もその暗闇にいる人たちに思いを寄せ、平和な世界の実現を願うためだと、教わった。

あれから17年。日頃は忘れてしまっているこの闇を、黙祷の短い時間に、ガマの湿った空気と共に思い出す。私は、この平和教育を受けられたことを、誇りに思う。

## 松本杏花さんの俳句

qiān lǐ tóng fēng  
「千里同風」より

## 友好の証や山の初紅葉

yǒu hǎo zhī shízhèng  
有好之实证shānlán hóngyè chū rǎn hóng  
山恋红叶初染红jiāoliú cù měijǐng  
交流促美景

季语：红叶，秋。

赏析：这是松本女士二〇〇九年九月五日至十一日来我国访问，于九月六日参加牡丹江新短诗交流会期间所作。

虽然是初秋时分，但北方的枫叶已经染红了。这对从东京来的客人当然有所感动，因为彼处还处在残夏阶段吧。诗人没有局限于自然吟唱，而是将中日友好糅进其中：那如火如荼的红叶，不正是有好交流的结晶吗？触景生情是本首俳句的特色所在。

## 秋蝶と戯れにけり四面仏

qiū dié piānpīān wǔ  
秋蝶翩翩舞wéirǎo shénqí sìmiàn fó  
围绕神奇四面佛xiāng xì jí lè shū  
相戏极乐舒

季语：秋蝶，秋。

赏析：本首和下一首均为作者在游览蚤柬埔寨时所作。四面佛是指佛像面部为四方形，四面皆为佛脸。

秋蝶与佛像相戏，将静的佛像写活了。本来，秋蝶是令人怜惜的，因为她们行将就木。但是，她们却在有限的生命中，快乐地与佛像相戏，谱写出了壮丽的生命赞歌。

## 「四姑娘山・写真だより」の里を訪ねて—③ 水道の怪

佐々木健之

私たちの旅行グループは、一行10人中8人がご婦人で、男は私と河本義宣さんのみという自然界とは違う男女比になっていた。彼が意図的にそうしたのではなく、結果としてオットセイ型ハーレムになったようだ。しかし、実質は河本さんがご婦人方に奉仕する仕組みになっていた。ご婦人の皆さんは海外旅行の経験が豊富で、旅慣れていて、中国以外では比較的英語を多用するせいか、中国語はまるでダメで、私がホテル従業員などに「謝謝」など適当に相づちを打っているのを聞きつけ、あろうことか、「佐々木さんは中国語ができる」ことになってしまった。中国語は発音が難しく知識としては「四声」とか「有・無気音」などがあることは知っているが、私の発音はカタコトまでもいかないめちゃくちゃなものだ。

四川省の田舎では発音がでたらめでも、北京語が母語でない四川人もお互い様で、私のあきれた発音でも分かってくれるのを感じてはいた。同じ発音が中国国際航空の機内では通じず、かえって失礼にも「what?」などと聞き返してくるありさまだ。といっても会話ではなく単語の類だが。思うに、北京語が母語の人は、四声で聞く準備がいつもできているので、ある抑揚の発音に対応する漢語が瞬時に引き出されるらしい。正しい発音を聞かないと、意味不明または、別の意味と冷酷に断定するようだ。それに対し心優しい四川人は、北京語は外国語なので、状況で意味を汲み取ってくれるのではないかと、まあ、私の仮説である。

朝食が済むと3台のタクシーに分乗して、近郊の山の植物視察に出掛けた。

詳しい場所は省くが、軽い日帰りハイキングであった。私の乗った小太りの運転手、馬さんは歌がうまく、ハンドルを握りながらろうろうとチベット風の歌を歌った。これはすごいと、私がお当地ソングの「康定情歌」の冒頭部分を口ずさむと、すぐにノッてきて絶品のバリトンを聞かせた。帰路の運転では編曲版で披露してくれた。それも素晴らしかった。

馬さんは熱心な仏教徒(あるいはボン経?)である。丹巴への帰路、道ばたに建つ、日本でいえば道祖神ふうの祠の前でいきなり車を止め、五体投地の礼拝を始めた。私は、その礼拝の真摯な所作に、車にふんぞり返って見下ろしてはいけないような気持ちになった。彼だけが特別信心深いわけでもなく、地元の人にはラマ教のものらしき装飾小物品を身の回りに置いている。丹巴界隈で見た



大金川の岸に沿って広がる丹巴の街。画面奥が上流



丹巴で宿替えして投宿した「美人谷酒店」

車にはエンジンが掛かると小型「マニ車\*」が回転する仕組みの「電動マニ車」が助手席のフロントガラス内側に置いてある。日本なら成田山のお札のようなものであろうか。

夕方、昨夜泊まった「興丹賓館」に戻ると、大川健三さんが慌ただしく現れ、宿を変えることになったと一行に告げた。

宿替えの理由は、外国人を泊めるには一定の設備基準を満たしたうえで認可が必要で、「興丹賓館」はその資格が無いようだ。ホテル側が規則に従って公安当局に日本人宿泊者の滞在ありと届けたところ、認可のあるホテルへ移るよう指導されたようだ。

さらに大川さんは済まなそうに今回「興丹賓館」を選んだわけを説明した。それによると、まず第一は中心街にあり地の利がよいこと。そしてもう一つは、日本の共同通信の記者が数か月前に政府の手配で「興丹賓館」に





小学生の登校風景

泊まったこと(大川さん取材のため)。政府の世話で泊まったのなら、外国人を泊めてもよいホテルなのだ確認せずに思い込み、今回われわれが投宿した次第。私としては、いろいろ体験できてよいことだと思った。大川さんには予想外の出来事でお気の毒であった。

共同通信の記者が「興丹賓館」に泊まったとき、地元公安が外国人を泊めたことに対するお咎めが、なぜなかったかは中国の謎でわからない。

荷物をまとめると、ばたばたと引っ越しとなった。今度のホテルは「美人谷酒店」といい、大金川の川に面していた。私は2003年の12月末にこのホテルに泊まったことがある。現在日本滞在の彝族(中国の少数民族)、烏里烏沙さんに連れられて丹巴で泊まったところだ。この時の拙文は、「わんりい」に載せてもらった。大川さんと丹巴でお目に掛かり、「わんりい」とつながりができたのもこの時の逗留がきっかけである。

大川さんと烏里さんの出会いは、烏里さんが中国に一時帰国したとき、成都の書店で日本人(服装、雰囲気日本人とわかる)を見かけたので、話しかけたのがきっかけだそうだ。

到着した「美人谷酒店」は10年分の加齢を感じた。全体に照明が暗く、ソファは古くなり、玄関ロビーは雑然とし、壁ぎわに置いた大型テレビは従業員が楽しむものになっていた。

部屋割が決まったので、念のため室内設備を点検。シャワー室(鳥かごを縦に割って、プラスチックで覆ったような構造)の床に泥水が溜まっていた。言葉が通じないので身振りで、従業員のお姐さんに来てもらい、泥水を指さした。中国人はいい加減だから、この程度の掃除で済ませているが、なめられてたまるか! と、いう気持ちが



低学年は、身内が付き添って学校へ行く

あった。女性従業員は指摘した個所を見やるとなにやら言ったが、それでも水と一緒に泥を流してから立ち去った。そのあとどの程度改善したかを見ると、やはり泥水が着いている。中国人の掃除はこんなものかと、その場ではあきらめた。

しかし、これは私の中国人に対する偏見で、泥水付着の原因は丹巴の水道だった。思い返せば前夜泊まった「興丹賓館」の水道水も清澄な透明な水とはいえなかった。移動した「美人谷酒店」の水は洗面所で流してみると、薄いコーヒーマグ色ともいえる、色つき水が流れていた。トイレの水も、水が流れ去った後には、泥が沈殿する。どうやら時間帯によって、泥の混入濃度に変化があるらしい。従業員を部屋に呼び入れて、掃除をさせても無駄なことだったのだ。言葉がよくできれば、わざわざ掃除をさせて済まなかった、といたかったがそれはできず、いやな気持ちがシャワー室の泥汚れのように沈殿した。

大川さんによると数か月前から、特に濁るようになり生活にも困っているという。水道沈殿浄水槽に不具合があるらしい。すぐに直さないところが不思議である。補足すると水が濁る前から、飲料水はすべて買い置きのペットボトル水を使っていたそうだ。(続く)

**マニ車**:円筒形で、側面にはマントラが刻まれており、ロール状の経文が内部にあり。ボン教では「マシモ車」という。サイズから、寺院などでは数メートルにも及ぶマニ車がある。チベット仏教とボン教の混在地区は仏具店で、どちらの宗教かを聞いてから内部の経文をセットしてくれる。チベット仏教の場合はマニ車を右回り、ボン教の場合はマシモ車を左回りに回転させると、回転させた数だけ経を唱えるのと同じ功德があるとされている。

(ウィキペディアより改変)





## モンゴル滞在日記 I

木之内せつ子

11年前からほとんど毎年モンゴルに行っている友人Mに誘われて、私のモンゴル行きはこの夏やっと実現した。以前から一度は行ってみたいと思っていた国だ。Mがウランバートルのモンゴル人馬頭琴奏者の家にホームステイしたのがはじまりで、それ以来、日本のMの家には、この10年入れ替り立ち替りモンゴルからの留学生やその家族がホームステイしている。留学生たちは彼女を“日本のお母さん”と慕っている。

### 7月4日(水)

MIATモンゴル航空、OM502便は、定刻19:10(現地時間)きっちりにウランバートル空港(チンギスハーン空港)に到着した。成田からウランバートル(UB)まで5時間半、時差は1時間。

日本でMから“定刻”なんてモンゴルではほとんど通用しないと聞いていたので、飛行機が定刻に着いたのは驚きだった。

“モンゴルタイム”という言葉がある。時間の約束をしてもその通りになることはまずないという。朝といたら昼、昼といたら午後3時過ぎ、夕方といたら夜、夜といたらその日は無理ということだ。Mも私と待ち合わせると遅れることが多い。実は彼女も時間だけはしっかりモンゴル人になっているのだ。

空港で出迎えてくれた二人の男性(デルメとトガ)は数年前留学生として来日し、日本のMの家にホームステイしていた。卒業後帰国し、今は仲間4人で起業し頑張っている。ふたりは“日本のお母さん”Mと熱

い抱擁、私とはもちろん握手だけ。

トガの運転でウランバートル(UB)市内に向かう。8時を過ぎても外はまだ明るい。市内に近づくにつれて車の量が増え交通渋滞。市内は高層ビルが林立する大都会。1時間ほどかかってまちの中心から1kmくらいのところにある彼らのオフィスに到着。マンション3階、3LDKで100m<sup>2</sup>くらいのそのオフィスの1室(トガの部屋)が今夜からの私たちの宿である。

外は雨。モンゴルは雨の少ない国と聞いていたが初日から雨に降られた。年間の降水量のほとんどが、6月から8月中旬に降る。

突然電気が消えて停電になった。誰も驚かない。すぐにローソクが用意されたが、2~3分で明るくなった。停電はモンゴルでは日常茶飯事だという。滞在中ほとんど毎日経験した。特に雨降りに多いそうだ。

中国の内モンゴル自治区を内モンゴルと言っているので、何の気なしに“外モンゴル”と言ってしまったら、Mが即座に、「それは清朝から見た呼称で、モンゴル人はそう呼ばれるのを嫌がる。モンゴル人の意を汲みこの呼称は用いるべきではない」と私を注意した。ころしよう。

Mはかれこれ10年もモンゴルに関わっているが、それにしてもお世辞にもモンゴル語が上手とは言えない。日本では彼女のところにホームステイしていた留学生たちは日本語が上手だし、彼女がモンゴルに行ったときは常時そのうちの誰かがエスコートしてくれるから、現地の言葉をほとんど必要としない。今回UBで私たちが宿泊しているところの4人も日本

への留学経験のある人たちだから、言葉の心配はない。

### 7月5日(木)

Mと私はふたりだけで歩いてまちに出た。目に入る看板が読めない。そこでハタと気づいた。モンゴルはキリル文字(ロシアンアルファベット)を使う。Mもキリル





文字を読めないと言う。でも堂々としているし、土地勘はかなり良い。

10分ほど歩いて横道に入るところでまずは両替。昨夜立ち寄ったときには閉まっていた両替屋だ。銀行よりレートが良いらしい。1万円で167,000トゥグルク(Tg)。急に財布が分厚くなりちょっとリッチな気分。

まちの中心のスフバートル広場の横を過ぎると中央郵便局がある。ここを目印に歩き始めると良いとMが教えてくれた。郵便局の中に入って奥に進むと絵はがきやちょっとした土産物が並べてある売店がある。絵はがきの種類も多いし切手も一緒に販売している。さっそく大量に絵はがきと切手(日本まで1,000Tg+税金10%)を購入。

それからまたしばらくまちをぶらぶら歩いて、メルクーリ・ザハ(市場)へ。ザハでは肉・魚・乳製品・野菜・果物などのほか、国外からの輸入食品、スパイスなどほとんどの食料品が売られている。

ザハの入口でザヤと待ち合わせている。ザヤの夫のダミが現在日本に留学していて、彼女も2年前から来日してMのところにホームステイしているが、夏休みでモンゴルに帰っている。

12:00の待ち合わせだったがモンゴルタイムで30分ほど遅れて彼女は現れた。昨年1月、日本で生まれた娘のスンドリと一緒に。近くのレストランで昼食をとり、ザハで買い物をした。肉は非常に安い野菜や果物はそれに比べてかなり高い。午前中はカラッと晴れていたのに、買い物をしている間に雨が降りだした。スコールのような土砂降りの雨で雷も鳴っている。小降りになったところで、ザヤの車で送ってもらった。こんな雨でも傘をさして歩いている人はほとんどいない。

家(彼らのオフィス)に帰り、夕食の支度にかかった。彼らは、今朝からはもう、1日1食は私たちに食事を作ってもらえると期待しているらしい。モンゴルまで来てまさかあ~!? と私は思ったが、Mはそのつもりらしい。結果的には私も野菜を切ったり、食器を洗ったりくらいの手伝いはした。ここの台所には大鍋1個とフライパンが1個しかない。

Mは慣れた手つきで、まずご飯を炊いて別の容器に移して、それから次の料理にとりかかる。因みにご飯は塩と油を入れて炊く。今夜の料理は肉野菜スープ。人参・タマネギ・ジャガイモをかなり大きく切ってニンニクと一緒に油で炒めてから、骨付きの肉(野

菜の何倍もの量)を入れて煮込み、塩とスパイスで味付けする。美味しい! モンゴル人の骨付き肉の食べ方は見事だ。ナイフで肉を削ぎながら口に運び、骨だけ残してきれいに食べきる。サラダもつくったが、モンゴル人はほとんど手をつけない。スープのなかの肉はほとんどなくなったが、野菜はかなり残った。翌朝残りのスープにご飯を入れて雑炊にしたらさらに美味しく食べられた。雑炊は彼らもよく食べた。

## 7月6日(金)

朝から雨。排水溝がないからたちまち道路は水浸し。モンゴルの道路は、夏はジャンプ、冬はスケートの練習ができる、ときいていたがその通りだ。水の溜まってないところをみつけて、跳びながら歩くのだ。冬は路面が凍っているから滑るのだろう。

昼近くなっても雨は止まない。昨日買ってきて書いた絵はがきを投函するために郵便局まで出かけた。モンゴルのまちなかには郵便ポストがない。UBの中央郵便局内には国内郵便用と国際郵便用のふたつのポストが向かい合って設置されてある。でもおそらくモンゴル国の郵便ポストはここにあるだけだろう。郵便を出すときは郵便局まで足を運んで窓口でお願いしなければならない。郵便配達も原則的にはないようだ。

郵便局には私書箱があるが、ほとんどが会社用で個人的にそれを利用している人はほとんどいないようだ。だからこちらからモンゴルの知人に手紙を出してもそれは局留めになり、郵便局から受取人に連絡があり、それを受け取りに局まで出向くか配達してほしいかきかれる。配達を希望すれば配達してもらって200Tgの手数料を払う。もちろん取りに行ってもよいのだが、歩いていけるとところに郵便局がないのが普通だ。

今はモンゴルでも携帯やパソコンが普及しているから、手紙はますます遠くなる。UBの郵便局に行っても手紙を出すのは外国人旅行者だけのようだ。

## 7月7日(土)

Mが「今日は七夕だから、日本に留学していた知り合いを呼んで、日本の料理をつくってご馳走する」と言いだし、朝からあちこちに電話している。留学していた本人やその家族で15人くらいは集まりそうだとのこと。みんな彼女に会うのを楽しみにしているようだ。

七夕の料理って何だろう？

煮物は筑前煮、揚げ物は天ぷらということになった。肉・ジャガイモ・インゲン・人参・シイタケを煮た。天ぷらはいろいろ種類をつくるのはたいへんなのでかき揚げにした。私は一口大のおにぎりを握り、クラッカーにゆで卵とキャビア擬きをのせ、人参とキュウリを長さ10cmくらいの細切りにしてグラスに立てた。

5時集合となっていたが、定刻に現れたのはひとりだけ、7時頃になってようやく10人くらい集まり、「七夕パーティー」は始まった。折り紙を半分に切り短冊にして、それぞれ願いごとを書いた。元留学生は全員日本語で書いていた。さすがである。笹がないの

で願いごとを書いた短冊はドアにセロテープで貼り付けた。9時を過ぎると、乳幼児を連れて参加していた人たちは帰りはじめた。その時間になってもやってくる人がいた。結局全員が引きあげお開きになったのは12時近かった。

4日間で何人ものモンゴル人を紹介されたが名前を覚えられない。デルメ、トガ、ザヤ、ダミ、スندگان等々。実際にはそれぞれもっと長い名前らしい。デルメはいただいた名刺にはバトデルメダシュミヤグマルとあった。

翌朝早く私たちはUBから1400km余離れた西モンゴルのホブドに行くことになっている。そこで「ボランティア」をする。実はそれが今回の旅の一番の目的だ。ホブドでの12日間のことは次回に。 (続く)

## ◇わんりい活動報告

### 月餅を作ろう！会 参加12名

2012年9月13日(木) 場所：中央公民

有為楠さんが「北京雑感」に書かれたように、中国でも高級菓子の月餅が、手作りで作れるものとは思っていませんでした。が、山西省旅行の折、村の人たちが集まって月餅作りをしているのを偶然見たり、月餅の木型を貰ったりしました。昨今は中国でも家庭で作られることは殆どない月餅ながら、今でも手作りしている風景があるのを知って何さんにお話ししたのが「わんりい」の会の月餅作りを始めるきっかけになりました。

2009年、何さんが月餅作り研究の成果をもとに月餅のレシピを纏め、私たちに作り方を教えて下さって以来、「月餅作り」は毎年秋の恒例行事になったようです。

月餅作りの楽しさは、なんといっても自分で餡を工夫できることです。小豆餡やカボチャ餡、サツマイモ餡、ココナッツ味の餡…と手許にある素材を使ったり、自分の好みで甘くしたり甘みを落としたり、ナッツの取り合わせをいろいろ変えたりとオリジナル月餅ができます。

さて、今年は何さんに教えて頂いたレシピを元に、25個が一単位になるように材料の分量を纏め直して下さった有為楠さんのレシピに添って月餅作りに挑戦しました。「わんりい」にイラストを寄稿下さっている叶霖さんや男性会員二人が加わった12名、皮ダネや餡が均等になるように量ったり丸めたり、型抜きではゴンゴンと派手な音を響かせての賑やかな月餅作りでした。

ところが、本来なら手慣れた月餅作りで、200個の月餅作りは3時過ぎには完了の筈で、出来立ての月餅でティータイムを取って歓談する予定がどうしたことでしよう、15:30を過ぎての追い込みになり、男性二人も奮闘

して、会場使用期限の17:00ギリギリの終了になりました。

結局、淹れたての美味しいコーヒーと出来立ての香ばしい月餅のお茶の時間は残念ながら夢と終わり、ゆっくり頂けたのは我が家に帰りついてからになりました。

今年10月28日(日)の「町田発国際ボラン

ティア祭・2012夢広場」でも、昨年同様に手づくりの月餅販売を予定していますから、手順をよく考えて手際よく作らなければいけないと反省したことでした。

とはいえ、小豆餡、ナッツ餡、ココナッツ味餡に、蓮の実餡の4種類の餡の月餅が一人16個づつのお土産となってニコニコ顔で終了しました。中国土産の蓮の実を使って、今年初めて作った蓮の実餡入り月餅が予想を超える美味しさだったことも併せて報告します。 (報告：田井)





## 24年度町田市「つながりひろがる地域支援事業」開催に当たって

町田市鶴川には、2002年に創設された21世紀アジア学部を持つ国士舘大学町田校舎があります。ここで凡そ2000人の学生が学んでいますが、その凡そ半数がアジア各国からの留学生（主として中国からの留学生）達です。多数の留学生たちが鶴川周辺に住み鶴川地区を行き来している事実を、実は、私たちも知りませんでした。

何年か前、年に一度ながら何年間か、会のメンバーたちが国士舘在学の留学生たちの日本語授業の手伝いをしたことがあります。留学生たちが何人かずつグループに分かれて、地域の人々と時事問題などについて語り合い、その内容をレポートするという授業でしたが、留学生と時事問題を語り合うというところで会が協力しました。

びっくりしたことには留学生たちは達者な日本語を話し、話題のテーマについてもよく研究していて真摯に語り合うことができました。それぞれの留学生は真面目に学業に励んでいる精神的にもたくましい魅力的な若者たちでしたので、留学生たちを地域に紹介し、交流する機会が作れればと感じた事でした。

しかし、留学生たちは学業とアルバイトで自由な時間が少ない事もあって、なかなか地域と関わり交流する機会を作るのが難しいままでしたし、地域の人々の中には自分たちの地域に留学生がいる事実も未だ知らないというひと達も多数いらっしゃいます。

そのような状況がありましたので、町田市・市民部市民協働推進課からの上記市民提案事業への誘いを貰ったのを機に、地域に留学生を紹介し知って貰う機会として申請し、結果、受理されて昨年12月第一回目を実施しました。

地域支援事業は「地域の問題解決のために、地域がつながりひろがる」ことへの助成ということで、町田市と（財）町田文化・国際交流財団の後援のもとに、鶴川3団地自治会、平和台自治会、日本スリランカ文化交流協

会の他、能ヶ谷地区6自治会、広袴地区2自治会、鶴川地区3丁目及び4丁目自治会などの地域の自治会・町内会ほか、コープとうきょう・参加とネットワーク推進室の協力と支援を頂き、事業は盛会に終わることができました。また、留学生たちの実に堂々としたスピーチは、参加の皆さんに好感を持って受け止めて貰えました。結果、留学生の存在に関心を持って頂けたことは大きな成果だったと思ったことでした。

日本での留学生生活は、留学生たちの対日感情に関わる大切なことです。今年4月、文科省も重い腰を上げ、留学生と地域の交流を通して日本のイメージアップに供することを目的とした新年度予算を組み、留学生の街づくり構想を発表しました。

町田市は留学生や外国の方が多地域です。相互の理解と友好を一層深め、温かな交流を続けることが、今騒がれている尖閣諸島問題や竹島問題のような、国同士のぎくしゃくした関係が生じて、びくともしない国を越えた友好の土台作りになるのではないかと思います。事業は続けることで更なる成果となることを期待し、この春、第二回目を市に申請し認可頂けました。

尚、今年の事業・第三部の中国民族音楽では、昨年も演奏頂いた揚琴演奏の林敏さんの他、久々に馬頭琴奏者のチ・ブルグッドさんが夫人の美炎さんと一緒に演奏くださることになりました。馬頭琴演奏では人間国宝の称号を持つ、ブルグッドさんの父・ボラグ氏譲りの深い音色を味わって頂ける筈です。加えて日本が誇るソプラノ歌手 森麻季氏との回を重ねてのジョイントコンサートで評判のオペラ歌手（バリトン）<sup>さいそうほう</sup>崔宗宝氏がモンゴル民謡などを歌ってくださいます。それぞれに国内外で活躍の実力者たちです。今年も昨年同様の、事業に添った成果を上げることができると期待しています。

皆様のご協力をよろしくお願いします。尚、申し込み方法などの詳細は、11月号で掲載します。 （田井）

今年の開催日が決まりました！平成24年度町田市「つながりひろがる地域支援事業」対象事業

つなげよう 広げよう 地域の「輪」と「和」  
聞いてみよう！留学生たちのスピーチ！！ 楽しもう！中国民族音楽！！

1部：アンデスの民族楽器・ケーナの演奏 / 山下孝之 2部：留学生たちのスピーチ  
3部：楽しもう！中国民族音楽 馬頭琴演奏 / チ・ブルグッド & 美炎 揚琴演奏 / 林敏 歌 / 崔宗宝 司会 / 銭騰浩

◆2012年12月2日(日) ◆場所：鶴川市民センター・ホール 13:00～15:45 ◆参加費：500円

買い物をした時にも日本とスリランカとの違いに気が付きます。日本であればその売り場の店員さんにお金を払えば、包装して袋に入れられた品物をすぐに受け取る事が出来ます。デパート等では何処か遠くにあるキャッシャーまでお金を持って行くので、しばらくの間待たされる事はありますが、概ね簡単に買い物ができます。

スリランカでは一部のスーパーマーケットと外国人観光客相手の土産物店を除いて、商品を受け取るまでに若干時間が掛かります。「この商品が欲しい」と店員さんに伝えと、先ずこの店員さんが商品名だか商品番号だかを書いた紙をくれます。次にキャッシャーの店員さんにその紙を渡してお金を払うと、その店員さんは大きな台帳に金額か何かを記帳してからレシートをくれます。台帳に記帳している間に最初の店員さんが商品を商品渡し担当の処に持って行きます。お客さんは商品渡し担当の店員さんにレシートを見せると漸く品物を受け取る事ができます。日本なら一人の店員さんで出来る事ですが、スリランカの物差しではこれが普通です。そうそう、何をチェックするのか定かではありませんが店を出る時にもガードマンに商品とレシートを見せます。これは日本進出のコストコ（アメリカ合衆国に本店を置く会員制大型スーパー）でもお馴染みで、不正防止のつもりなんだろうかね。

何故、こんな面倒くさい事をするのか考えてみました。悪意に考えれば、店主が店員又はお客を信用していないので、お金を扱う部署に親族などを配置して、ネコババと万引きを防止しているのでしょうか。善意に考えれば雇用機会を増やしているのでしょうか。最近の日本でも雇用機会を増やすためにワークシェアリングという言葉をよく耳にします。スリランカでは偶然かもしれませんが以前からワークシェアリングをして、最先端の労働環境を作っていたのかも。だとしたらこれは凄い！

ただしスリランカは社会主義国家なので、最低賃金が厳格に守られています。ワークシェアリングをしても時給は同じなので、働いた時間だけ賃金を貰えるので合理的です。この最低賃金は周辺のアジア各国に比べてかなり高めに設定されています。この最低賃金が足枷になって、海外からの投資が周辺国に比べて少ない原因です、ジレンマですね。

前述したように、意外に知られていませんがスリランカは社会主義国家なのです。正式な国名は、英文表記では Democratic Socialist Republic of Sri Lanka、

日本語表記では、スリランカ民主社会主義共和国です。1948年に、英国からイギリス連邦セイロン自治領として独立しました。1972年にはイギリス連邦からも独立して元々の国名であるスリランカ共和国になりました。ところが何故か1978年にはスリランカ民主社会主義共和国に改称されています。この経緯は興味がありますので、いずれ調べてみましょう。

思い返してみますと駐在員としてスリランカに住んで居た頃にも、大学生、公務員、工場や建築現場で働いている労働者等がしょっちゅうストライキ騒動を起こしていました。社会主義国家なので労働争議が多かったのだですね。大学が、半年～1年間も、学生と教師が一緒になってストライキをやってみたり（スリランカの大学はすべて国立大学なので、教師は当然公務員です）、公営バスの運転手がストライキを実施すると一般人が喜んでクリケット場が急に混んだり、役所に行ったとしても会いたい人は目の前にいるのに、その本人から今日の午前中はストライキなので午後からもう一度来てくれなどと言われる程度の緩い社会主義でした。ゲートには何やら主張を書いた檄文のようなものが張られていますが、労働者のピケラインがあって、それに警察隊が対峙しているような厳しさは滅多にありませんでした。

話を元に戻します。更にプレゼント用に包装してもらおうとなるともっと大変です。大概の店には包装紙を置いていないので、別の店で同じ工程を繰り返して購入した上に包装してもらおう作業が加わります。日本ならば、アツと言う間に包装してもらえますが、スリランカでは、四苦八苦した挙句にセロテープだらけになって包装されてくる事が多いのです。たまには角の辺りから中身が見えたりするのは愛嬌というのでしょうか。でも、目の前で四苦八苦しているのを見ているので、ボホマ イストゥーティ（シンハラ語：「どうもありがとう」）と言うほかありません。どうやら1枚の包装紙を全部使って、折ったり、畳んだりして包装するのが苦手なようです。もう一つの理由は包装紙を出来るだけ大きく余りを残して、お客さまに渡すのがサービスと考えているような節があります。スリランカでは、まだまだ綺麗な包装紙は貴重なのです。そういえば、その昔、僕の母親も○越や高○屋、伊○丹等の包装紙を綺麗にほどこいて再利用しようとしていたのを思い出しました。結局は使い道が無くて押し入れに山ほど溜まっていたけどね。お祈りをする時の話などは次回にします。



## スリランカ映画について（前篇）

為我井 輝忠

‘わんりい’の読者の中でスリランカ映画を見たことのある方は非常に少ないと思います。しかし、アジア映画の中では独自の路線を行くスリランカ映画は日本ではわずかながらも少しずつ紹介されており、年に1、2度くらい国際映画祭等で見ることが可能です。とは言っても、恐らく多くの方々にとってはほとんど見る機会はないでしょう。そこで、今回はそのような未知とも言えるスリランカ映画について私見を述べて見たいと思います。

スリランカ映画と言えば、先ず名前が挙がるのは巨匠レスター・ジェームズ・ピーリス(Lester James Peries) 監督です。1919年生まれですから現在では93歳になる高齢ですが、彼は1950年に『運命線(The Line of Destiny)』を発表して、これまでのインド映画の亜流的存在だったスリランカ映画をその影響から脱して、独自の世界を築いたルネッサンス的存在となりました。彼の作品はかなりあります。全部見ているわけではありませんが、どれも素晴らしい作品ばかりと言つてもよいでしょう。『運命線』以外に主な作品として次のようなものがあります。

- ①『変わりゆく村』(1964)
- ②『秘宝』(1970)
- ③『ジャングルの村』(1980)
- ④『変革の時代』(1982)
- ⑤『時の終焉』(1985)
- ⑥『日が沈むところ』(1994)
- ⑦『湖畔の邸宅』(2002)

ピーリス監督はコロンボ生れで、当初劇場やラジオ局で働いた後、「ザ・タイムズ・オブ・セイロン」のロンドン特派員を務めてイギリスに渡り、その後、49～50年にかけて短編3本を作る機会がありました。やがてスリランカ政府映画部のイギリス人ドキュメンタリー制作者ラルフ・キーンの助手としてスリランカに戻りました。54年から翌年にかけて、2本の短編ドキュメンタリーを監督し、56年に最初の長編『運命線』を製作し、国際的に大きな評価を受けました。70年ニューヨーク近代美術館で、81年にロンドンで彼の作品の特集映画会が開催されました。日本では、福岡で毎年開催している「アジアフォーカス福岡映画

祭」や東京での「スリランカ映画祭2002」等で紹介され、これまた大きな反響を呼びました。

『運命線』は、スリランカ最初の劇映画で、それまでのインドの影響から脱出した初の作品で、以後この国の映画の方向を決定した記念碑的な作品と言えるでしょう。ストーリーは、病気を治す力があると予言された少年とそれが村に呼び起こした騒動を描いた



レスター・ジェームズ・ピーリス監督

作品です。この映画は素人俳優を起用した抒情的な作品で、インドのサダジット・レイ監督と比肩されるほどです。

これまでスリランカで上映されている映画はインド映画とごくわずかな欧米の映画作品に過ぎず、インド映画と言えば歌あり、踊りあり、派手なアクションに満ち、しかも恋愛物といった娯楽作品ばかりでした。一度見ればもう十分というようなものばかりです。しかし、外国のシリアスな映画を見る機会が増え、インド映画に物足りないと感じ始めた人々が多くなり、そのような世相を背景にして新しい映画を作ろうとする人々が興ったのは当然でした。

その後ピーリス監督に触発されて多くの映画監督が生まれました。その一人に彼の夫人スミトラ・ピーリスが初の女性監督として登場したのも特質すべきことです。さらに新しい流れについて次号で詳しくみたいと思います。実際にピーリス監督だけでなくスリランカの映画を見たいと思われる方がいれば、いずれ見る機会を設けてみたいと考えています。



「運命線」一場面

その日塔公から私を運んでくれた短気な運転手のタクシーは、康定のバスターミナルの前に到着した。ずいぶん長い時間を塔公で過ごしていたような気持ちになっていたが、この前康定を後にしたのは実はほんの4日前だ。康定に残して置いた私の荷物はバスターミナル前に立つビルの中の、香格里拉(シャングリラ)招待所に預けてあった。

この安宿が何軒も詰まったビルはバスターミナルまで徒歩1分と旅の利便性には申し分無かったが、今回はちょっと趣向を変えて違う場所に泊ってみる心づもりがあった私は、運転手に「ちょっと待ってて」とお願いし、急いでビルの階段を駆け上がって宿の中に飛び込むと、のんびりと受付に座っていた招待所の気のいい姉さんに「預けてた荷物を取りに来たの」と告げた。招待所の姉御は「ああ、あなたね」直ぐに察してくれた様子で自分の部屋に置いてあった大きなザックを運び出して来てくれた。

こんな汚れたザックを嫌な顔もせず自室に置いてくれていたとは、やっぱりこの姉さんは気のいい人だ。御礼を言ってザックを背負い再び急いで階段を駆け下りてタクシーまで戻ると、他の客は皆降りてしまっており、私一人の為だけに待たされていた短気な運転手は、既にちょっとイライラしている様子だった。

「ちっ! 小姐、いったい何処に行きたいんだよ」

「ごめんごめん! 近くだからさ」

中国世界からチベット文化圏への入り口となるこの康定は、天空の世界から下界に降りてくるチベット族の人々の都会への玄関口となる町でもあるが、これからチベットエリアに足を踏み入れようという旅行者達の、チベット世界への拠点となる町でもあった。

それ故「住宿」などと記された看板を掲げて軒を連ねる一般中国人向けの安宿とは別に、中国の田舎町には珍しく「ゲストハウス」と呼ばれるような外国人旅行者向けの安宿も存在していた。そのような安宿は旅人用のガイドブックや口コミで宿を訪れる、世界中から集まってきたバックパッカー達の溜まり場となっていて、宿の共有スペースとしてテーブルなどが設えられたリビングでは、そこで知り合った旅人達がお茶などを飲みながら各々の旅の武勇伝や情報交換に花を咲かせて

いるのが常だ。どこの国でもそういった宿にはその土地やオーナーの個性が色濃く反映されていて、お互いそんな宿を泊まり歩いている人間同士で、世界の何処何処の宿が良かったなどと語り合うのも楽しく、旅人達の中にはそんなゲストハウスを渡り歩くこと自体が旅の目的となっているような人もいる。それはそれで楽しいものだが、旅の最中はどちらかといえば興味の対象が土地の人間である私は、これまであえて旅行者同士で交わる事を積極的に求めたりはしていなかったのだが、この日は旅の最終目的地であった塔公からとうとう康定まで戻ってしまった事で、これで旅を終えねばならない寂しさからすっかり人恋しい気持ちになっていた。

そこで、自分と同じバックパッカーの溜まり場と言える安宿へ行けば、きっとこれまでの旅の話を共有できる話し相手が見つかるのではないかと、その宿を目指してみる気になったのだ。しかし、黒帳篷(ハイザンパオ・黒テントの意)ゲストハウスというその宿は、バスターミナルから重いザックを背負って歩くにはそこそこの距離もあり、どうせだったらタクシーに乗ったまま宿の前まで送って貰いたかった。ところがである、運悪くそのゲストハウスに向かう道は混んでいた。ただでさえ私に待たされ機嫌を悪くしかけていた運転手は、これで更に苛立ちが増してしまい、「駄目だ! 駄目だ! こんな道は行かんぞ! ちゃんと康定まで連れてきたんだ。もうここでいいだろう?」とすっかりヘソを曲げてしまい、なんだかんだで宿までの道中の半分は稼いだ私も譲歩して、「判った判った、ここで降りるよ〜、ありがとね」と素直に御礼を言ってタクシーを降りた。

この旅で日本を出たのは7月だったがもう9月に入っていた。だが9月に入ったとはいえ、まだまだ日中の気温は高く、日差しは強い。

タクシーを降りた私は例によって背中に大ザックを背負い、胸に小ザックを担ぎあげ、吐息をつく強い日差しに額の汗を拭いながら宿の方向に歩き始めた。道路脇の歩道をいくらも進まないうちに道の脇から鋭い口笛の音が響いて来たのに気を引かれ、そちらに顔を向けた私は思わず目を見開いた。

ええええええ—————!!!

道端にとめた車の窓から、私に向かって口笛を飛ば



していた人物は、なんと1か月前に往路の稲城で出会ったタクシー運転手、じゃがいも兄ちゃんの次仁扎西(シャーレン・ザーシー)だ。私を乗せて亜丁まで行ってくれる約束をしていながら、出発当日の朝になって約束をキャンセルした憎たらしい奴だが、食事をおごって貰ったり、どうも憎めない愛嬌があったりと、この旅で出会った人間の中でも特に印象深い人物だった。

な、何であなたが此処にいるの~~~~!!??

旅の最後の最後とも言えるこの後に及んで、既に再び過ぎ去った記憶の中の土地となりかけていた稲城亜丁の香りを彷彿とさせる人物に、思わぬ場所で遭遇した驚きと喜びで思わず叫び声をあげてしまった私だが、「稲城から客を乗せて康定まで来たのさ」との彼の言葉にすぐさま納得した。

あちこち寄り道しながら康定まで戻ってきた私には、稲城から康定の道のりはずいぶん長く感じられたが、数年前と比べ道路事情のととのった今では稲城から康定までは1日あれば走ってこられる距離だ。その上四川省チベットエリアの核ともいえる康定には何処の町からも長距離タクシーのニーズがあり、確かに私が稲城滞在していた折にもそこで知り合った旅行者がタクシーをチャーターし康定に向かっていたのを見かけていた。複数人数で割り勘にすれば、チャーター料金もバスに乗るのとそう大差ないだろう。

次仁扎西(シャーレン・ザーシー)が助手席に座った車には、運転席にもう一人真っ赤なTシャツを着こんだ伊達男が乗っており、稲城からは二人交互に運転しながらやってきたらしい。私には赤シャツの彼の事は記憶に無かったが、先方は私の事をどこかで見かけていたらしく、次仁扎西同様、旧知の知人として私に投げかけてくる屈託のない笑顔と態度に親しみが感じられた。

「ところで君は亜丁に行かれたの？」

ちゃんと、自分が私との約束を反故にした事を覚えていたらしい次仁扎西の質問には、思わず苦笑してしまった。

「ところで、どこへ行くんだい？」

「この先のゲストハウスまで」

「送っていくぜ、乗って行けよ」

「やった~~~~!!」

次仁扎西の人柄は稲城で一緒に過ごして判っていたし、とにかく亜丁の知り合いに出会えた事が嬉しくて堪らない私は大喜びで旧友? の車に乗り込んだ。思わぬ仲間が増えて気分が盛り上がったらしい彼らも、「よ

~~し、レッツゴー!!!」と縦列駐車していた車を発進させようと、勢いづいて車をバックさせた瞬間、ガツシャーン!!! という音と衝撃が伝わってきた。

目を見開き顔を見合わせたまま固まってしまった赤シャツと次仁扎西が次の瞬間車を飛び降り、彼らの後を追った私が車の後部に回ってみると、見事に後ろに停まっていた車のフロント部に激突し、砕けたヘッドライトのプラスチックが道路に散らばっていた。

あわわわ~~~~!! やっべえ~~~~! 慌てた二人が車を停めていた脇の広場の縁に立ち、周りの人間に後ろの車を指差すと「あの車の運転手は何処にいるんだ?」と尋ねても、「いや知らないよ」との答えが返ってくるばかりだし、額に手をかざして辺りを眺め渡しても、誰もこちらに注意を向けている様子的人物もいない。

「・・・ってことは？」

「よし!」

「逃げろ~!!!」

二人は慌てて再び車に飛び乗り、「小姐、早く車に乗れ~~!!」との叫び声に追われるように私が車に飛びこむと、車はギュイーーン! と急発進して、急いでその場を立ち去ったのだった。

たまたま自分に再会した為に思わぬトラブルが勃発してしまい、私としては二人に申し訳ないような気持ちでいっぱいになりながらも、一連の出来事はまるでドタバタ漫画だ。

とりあえずその場から逃げおおせたことで、二人とも笑いながらケロツとしている様子だし、私も可笑しいのと申し訳ないのが入り混じった複雑な気持ちで「ごめんね・・・私のせいで」と声をかけると、「気にするなっことよ!」と赤シャツが昭和の伊達男風にきっぱりと答えてくれた。

その後二人はコソコソと裏道を通り、ちゃんと当初の目的だった黒帳蓬ゲストハウスの前まで私を運んでくれると、目立たないように建物の影に車を停めた。

私はゲストハウスにチェックインを済ませ、自分に与えられたドミトリー(相部屋)のベッドの上に自分の荷物を放り出すと、直ぐに二人の待つ車に走って戻った。元々人恋しくてわざわざ便利の悪いバスターミナルから離れた宿までやってきたのだが、既に一緒に過ごせる仲間が出来た今となつては、この宿で時を過ごす意味もなくなっている事にその時は気づいていなかった。

(続く)

## 映画「モンサントの不自然な食べもの」 & 「よみがえりのレシピ」をみて思ったこと 「食は命を支える大切な文化だ」 田井光枝

9月10日に食にかかわる映画のハシゴをした。

1本は「モンサントの不自然な食べもの」だ。監督はフランス人女性ジャーナリストで、ドキュメンタリー映像作家、マリー＝モニク・ロバン。モンサントという会社名はこの映画によって初めて知った。

人体への影響で最悪の結果をもたらしたPCBや枯葉剤や、ラウンドアップという除草剤(この名も初めて知った)を開発した会社がモンサント社で、アメリカで1901年に設立された。モンサント社は、自社が作り出した除草剤に影響を受けない遺伝子組み換えの大豆の種子を作り出したのを手始めに、様々な遺伝子組み換えの種子をつくりだし、この種子を特許として世界中の国々に輸出している。しかも、中には特許が犯されないように一世代限りで次世代の発芽はない種子もある。

政治的圧力や業界の思惑により祖先から受け継いできた種苗を使用できず、高額な種子を買わざるを得ない状況の中で、やむを得ず借金などをして種子を購入する。しかし、農作物の収穫は天候に左右される。農家が、次の年に種を購入できない悲劇も世界のあちこちで起こっている。心配される別の問題として、遺伝子組み換えで生産される農作物は当然ながら人の口に入る。人体に及ぼす影響は、放射能と同様に「近い将来」では分からない。

日本では遺伝子組み換えによる大豆の栽培は一般化されていないようだが、家畜の飼料や清涼飲料水の添加物として輸入されている。TPPによる食のグローバル化が始まれば、自由貿易の名のもとに輸入量は更に増えるにちがいない。果たして私たちの食の安全を守りきることができるのだろうか。その不確かさを政治家たちにはしっかりと認識してほしいと願う。

文明の進化は計り知れないものがあり、中にはその恩恵も沢山あるのだが、後期高齢者に属する人間にとっては、人が手を出してはいけない分野にまで人の手が伸びているのではないかと怖ろしいのだ。

「モンサントの不自然な食べもの」を見た足で、試写会の招待を受けていた「よみがえりのレシピ」を見て救われた。

此方の映画は、先祖伝来の「在来作物」を生かす道を示唆し、モンサント社とは正反対の方向から食を考える。山形県鶴岡地域の山里の農業は、モンサント社の種

子を使うような大量生産などには縁がない。山間の狭い耕地や山の斜面で昔ながらの農法により商業ベースに乗らない在来作物をも育てている。それらは地域の味を作り出す大切な食材なのだ。在来作物がなくなることは受け継がれてきた貴重な食文化がそこで滅びることを意味する。だから、自分が育てた作物の種を祖先たちがそうしてきたようにコツコツと採取し、優良な種を選別して育種し、収穫するのだ。

一方、レストラン「アル・ケッチアーノ」のシェフ・奥田政行氏(朝日新聞9月22日B版フロントランナーでも紹介)が、その在来食材の旬の、味や食感、香などの、独特の持ち味を新鮮な魚介や肉と共に最大限に生かしたレシピを考案する。テーブルには、生産者が試食して「何? これは俺のカブ!?!」とつぶやいてしまうような、思わずゴクリと喉を鳴らしてしまうような料理が並び、人々はこの料理の味を楽しみながら、美味しい会話を弾ませる。

「地域固有の食材を楽しむという日々の営みの先に、懐かしくも新しい未来の姿がある」と言う、1981年生まれの若い監督(映画撮影時は20歳)の言葉が嬉しい。

食材も料理も、人が誕生して以来、その土地に密着して受け継がれ、更なる美味を求めて育てられてきたものだ。あだおろそかにグローバル化の手に委ねてよいものではない。日本各地に「道の駅」ができて、地場の生産物を眺めたり手に入れたりする楽しみが増えてもいる。

女性も仕事をするのが当たり前になり、家族の食事の準備に充てる時間は減少し、なにかと忙しくなりつつある現代だが、食は命を支え、命を繋いでゆく大切な文化だ。食を大事にする風潮を育てたい。

### 「よみがえりのレシピ」(監督:渡辺智史)

於:ユーロスペース ☎03-3461-0211  
<http://www.eurospace.co.jp/>

10月20日(土)~11月17日(金)

20日(土)~26日(金) 10:00/12:00

27日(土)~11月9日(金) 10:00/12:00/14:00

11月10日(土)~11月17日(土) 10:00

\*17日以降についてはお問い合わせください。





第5話：成績表

「ママ、隣の小明シャオミンがお母さんに叱られているよ。成績表の1を5に書き換えたのを、お母さんが見つけたんだって」

「まあそう！ あの子は、ほんとにしょうがない子ね。貴方はそんなことしないわよね」

「僕はあんな馬鹿なことはしないよ。1を4に変えただけだよ」

第6話：二枚のメモ

母親が夜遅く帰宅すると、床の上に落花生の殻が散らかっていて、テーブルの上に紙が一枚置いてあった。子供の字で、「ママ、ごめんなさい。明日必ず掃除しますから」と書いてあった。綺麗好きな母親は、すぐに掃除をして綺麗にした。寝ようとして寝室へ行くと、ベッドの上にもう一枚の紙を見つけた。そこには、「ママ、どうも有難う」と書いてあった。

第7話：先生に褒められた

小貝シャオベイは、学校から帰ってくると、興奮した様子で母親に言った。「ママ、僕、今日先生に褒められたよ」母親は、「そう。なんて褒められたの?」と訊いた。小貝、「先生は、僕に直接言ったんじゃないんだけど、友達を叱るときに、『お前はクラスで一番駄目な生徒だ。あの小貝でもお前よりはましだよ』と言ったんだよ」

第8話：白髪は何故生えるの?

3歳の宝宝バオバオは大変ないたずらっ子で、何時も母親に叱られている。ある時、宝宝は母親の頭を見ながら不思議そうに尋ねた。「ママの頭にはどうして白髪が生えてくるの? 白髪はどこからくるの?」

母親は答えた。「子供がいたずらで、聞き分けがないと、すぐにパパやママの頭に白髪が生えて来るのよ」

それを聞くと、宝宝は目をくりくりさせていった。「そうか。ママ、僕、どうしておばあちゃんの頭が真っ白なのか分かったよ!」

《'わんりい' 掲示板》

全員集合!! 第15回 町田発国際ボランティア祭 2012夢広場

～ この星に平和と希望を ～

10月28日(日) 10:00～16:00 於:まちなかの駅「ぽっぽ町田」イベント広場

国際支援と友好活動をしている町田市と町田市周辺のボランティア団体が集結! エスニック料理、民族芸能、エスニックグッズいっぱいのお縁日! 今年も昨年に引き続き「頑張ろう!日本!!」の気持ちを込めて開催し、オペラ歌手(バリトン)の崔宗宝さんが祭の趣旨に賛同して、宮沢賢治作詞「雨にも負けず」などを歌ってくださいます。

また、今年は、中央商店街の協力を得て新しい試み「アジアの国々の名前・ビンゴ」(14:30頃～)をします。「わんりい」の会は、恒例の、遊牧民風味のエスニック焼鶏に加えて今年も手作りの美味しい月餅を販売します。ご都合つく皆さん、是非お出掛けしてご賞味ください。



- 問合せ：☎ 042-722-4260 町田国際交流センター
- 主催：2012夢広場実行委員会 ● 共催：(財)町田市文化・国際交流財団

◆わんりいの催し

《ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう!》 Vol.2

◆ 会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など) ◆ 定員：15名(定員になり次第締め切ります)

▲ 2012年10月23日(火) 10:15～11:45

▲ 場所：まちだ中央公民館・6F 視聴覚室

田市原町田6-8-1/小田急線町田駅南口徒歩5分  
JR横浜線町田駅ルミネ口徒歩3分

▲ 講師：Emme(歌手)

東京芸術大学邦楽科長唄別科卒業。日本の伝統音楽・長唄の素養をバックにした、たおやかなオリエンタルヴォイスの独自の歌のスタイルを誕生させている。

日本人が長い間、嬉しいとき辛いときの折々に歌ってきた童謡や抒情歌などの愛唱歌は、日本人の心の歌といえるでしょう。ボイストレーニングを組み合わせ、気持ちよく歌いましょう。



▲ 11月予定：11月24日(土) 10:15～11:45  
練習用の歌は、参加者の希望で決めます。

◆ 当日は動きやすい楽な服装でご参加ください

● 申込み：わんりい ☎ 042-734-5100 E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

## 是非! ご来訪を!! 中国・雲南省の魅力を詰め込んだ写真展・2題

▲場所：町田フォトサロン(薬師池公園内)(駐車場有)

バス/小田急線町田駅北口POPビル先21番乗り場、野津田車庫行又は本町田経由鶴川駅行乗車所要15分(道路状況で遅延有り)、「薬師池」下車、徒歩3分

▲期日：10月31日(水)～11月5日(月)(火曜日休館)

▲時間：9:30～16:30(初日は13:30～ 最終日15:00迄)

### そのⅠ 第3回 雲南の小さなカメラマン

於：町田フォトサロン1階展示室

中国・雲南省の少数民族の小学生に、撮りっきりカメラで自分たちの生活を撮影して貰いました。純粋な感性で撮った作品は、子ども同士のとびっきりの笑顔、家族愛が深く表現されたもの、大人が考えもつかない構図など、魅力一杯です。第3回目の写真展として皆さんに披露します。

●主催：NPO法人 日本雲南聯誼協会

●問合せ：☎03-5202-5260(東京事務局)

### そのⅡ 奥脇弘久写真展

「雲南・少数民族の暮し」(町田市写真協会後援)

於：町田フォトサロン2階展示室

奥脇氏は、左記のNPO法人日本雲南聯誼協会のメンバーとして回を重ねて雲南省を訪問し記録しています。2009年に開催の「少数民族を訪ねて—雲南・貴州・ベトナム」に続く写真展です。尚、奥脇氏には、9月号及び10月号の「わんりい」の表紙を飾って頂きました。11月号も掲載を予定しています。

●問合せ：☎042-753-2061(奥脇)

#### ◇わんりいの催し

### 第13回 中国語で読む・漢詩の会

▲場所：まちだ中央公民館6F・視聴覚室  
町田市原町田6-8-1 / 小田急線町田駅南口徒歩5分  
JR 横浜線町田駅ルミネ口徒歩3分

▲月日：2012年10月14日(日)

▲時間：10:00～11:30(講座は午前です)

▲講師：植田渥雄先生(現桜美林大学孔子学院講師)

▲会費：1500円 ▲定員：20名

\*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎050-1531-8622(わんりい)

E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp

よく知られている漢詩を、中国語の音とリズムで楽しもう! 正しい発音で読めるように練習しよう! 漢詩の時代的背景や詩に描かれている情景を知って漢詩を一層楽しもう!



#### 使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

### 中国を知る会・11月例会に参加しませんか

「中国を知る会」は、まちだ市民大学2000年度「国際学」受講生によって2001年4月に発足した会です。現代中国を、会員が選んだテーマについて、いろいろな角度から学習した成果を発表し合い、情報交換しています。11月はこの8月に中国東北部(大連、瀋陽、長春)を旅行して来たばかりの為我井氏にそのレポートをしていただきます。

#### ▲日満州を歩く—スライドと講演

●お 話：為我井輝忠氏

●日 時：11月19日(月) 18:00～20:30

●場 所：町田中央公民館 視聴覚室(定員36名)

●参加費：無料

●申込み：床呂英一

Eメール：m-tokoro@mta.biglobe.ne.jp

◆メール対応が不可の方は、FAXで田井が申し込みを受けます。FAX：042-734-5100

#### 【「わんりい」の原稿を募集しています】

「わんりい」は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と関係者の皆さんの原稿でまとめられています。中国で体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又「わんりい」に掲載の記事などについても簡単なお感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル「わんりい」

#### 【10月の定例会及び11月「わんりい」発行日】

◆定例会：10月11日(木) 13:30～(田井宅)

◆11月号の発行日：10月31日(水) 13:30～(田井宅)